山陽新聞　2021年12月26日（日）　日曜ワイド　（24面）

県立大在学中に設計

総社にモデル住宅

「学生のアイデア」実現

岡山県立大（総社市窪木）で建築を専攻した卒業生が在学中に考案した設計のプランを盛り込んだモデル住宅が、総社市井手に完成した。「既成概念にとらわれない家づくりがしたい」と、倉敷市の不動産会社が連携を企画し、3年がかりで実現。リビングとテラスを一体化して広い空間を生むなど、随所に工夫が見られる。（太田知二）

完成したモデル住宅の内部。内外を一体的に使える工夫がある

モデル住宅は、商業施設が並ぶ市街地の一角に整備。1階中央のリビングと東側のテラスに同じタイルを張り、段差もなくして屋内外の行き来をしやすくした。逆側のテラスはウッドデッキで、テラスと接した室内には椅子代わりに使える段差を設置。3カ所のスペースがつながる構造で、ホームパーティーなど大勢の人が集まる使い方を可能にした。

「思った以上に個性ある建物になった。若さの可能性を感じる」。プロジェクトを主導したエス土地調査企画（倉敷市福島）の中山田英樹社長(50)がほほ笑む。

倉敷の会社連携　既成概念とらわれず

中山田社長が知人の大学生から「デザインから製品になるまでを体験できない」と聞いたのが協業のきっかけとなった。学生の成長とともに「魅力ある家ができるのでは」と考え、取引がある金融機関を介して同大に連携を打診。2018年8月に共同研究の協定を結び、取り組みをスタートした。

大学ではデザイン学部建築学科の西川博美准教授(49)と学生4人がプロジェクトチームを結成。会社側が示した間取りなど基本構想を踏まえ各自で案をまとめ、プレゼンテーションを経て、当時3年生だった荒川依里香さん(23)のデザインを採用した。

新型コロナウイルス禍による中断を挟み、着工したのは6月。建設を手掛ける地元工務店の助言も受け、プランも10回ほど練り直した。完成間近の11月には荒川さんが現地を訪れ、施工の状況を確認した。現在は大手住宅メーカーに勤めており、「机の上では分からない感覚的な部分が体験できた。今の仕事にも生かされている」と言う。

12月からは一般公開（予約制）を始めた。工事中は学生が何人も現場に足を運び、建築の基礎を体感したという。西川准教授は「デザインや発想を形にする過程と難しさが分かったはず。連携は今後も続けたい」と話している。

現場を確認する荒川さん（左から2人目）ら関係者。学生のアイデアを設計に盛り込んだ

山陽新聞社提供